

モンゴル遊牧經濟の脆弱性

についての覺書

原 山 煌

モンゴル遊牧民社會において、遊牧と狩獵（あるいはその他の）という異種の經濟形態が互いにどのように關わりあっているのか、というテーマは、私達にとって常に新鮮な宿題であり續けている。私はかつて「モンゴル狩獵考」（本誌第三二卷第一號、一九七二年。以後、拙稿と略す）において、限られたスペースではあったが、その問題に取り組み些かの所見を世に問うた。このほど、吉田順一氏は本誌第四〇卷第三號（一九八一年）に「モンゴル族の遊牧と狩獵—十一世紀—十三世紀の時代—」と題する論説を發表された。當該時期モンゴルについての專論としては、近頃になく長大なものである。この吉田氏の論説は、テーマが類似しているからでもあろうか、何箇所かにわたって拙稿に觸れられ、批判がなされている。私は、拙稿で考察したテーマそれ自體については、言い足りなかつた部分があるとは思っていない（勿論、幾つかの問題については、さらに深く考究しなければならぬと思つているが、とり上げ

た話題の方向は一應すべて明示したつもりである）が、「遊牧と狩獵」との關わりについての吉田氏の所説の前提に異論を持つもので、しかもその疑念は本質的な事柄に屬するもののように思われるところから、ここに貴重な誌面をお借りして若干の覺書を著し、吉田氏および讀者諸賢の御示教を乞ふことにした。

ことは、吉田氏論説の「原山氏の遊牧經濟にたいする評價は低すぎる」（一〇五頁）という指摘に存する。吉田氏は「遊牧經濟にたいする評價」をもつと高くせねばならぬと主張されるようである。その根據は「十二世紀後半—十三世紀のステップのモンゴル族は、少くとも通常の遊牧民程度には羊、山羊、牛、馬そしてラクダを所有していた」（二一九頁）、つまり當時の家畜数は「決して言われているほど少くなかつたと思われ」（同前）、モンゴルの家畜は「帝國建設後に著るしく發展を示した部分が當然あつたのであるが、基本的な部分は、それに先立つ時期において既に一定のレベルに到達していたと思う」（同前）ということにあるようだ。またその背景として、當時彼らモンゴル族は、森林の生活から離れて「ステップ型」の「通常の」遊牧民と同じレベルに達していた、という狀況を想定されているのである。ところで、遊牧經濟と、ここで問題になっている狩獵をはじめとする諸種の經濟形態との關わり（その關わりの上にこそ、トータルとして遊牧經濟は成り立っているのだが）のありようを考へるとき、先ず最初、前提となるべき遊牧經濟それ自體の能力を冷靜に見定めることが、なによりも大切な課題となることは疑いない。その評價の高低（あるいは正しいかそうでないか）によつては、關聯する經濟形態への見方にも大きなブレをまねくことになるだろう。つまり、トータルとしての遊牧經濟を語る論

議が、そもそのの出発点からそれぞれ食い違った次元で勝手に進んでしまふことにもなりかねない、という危惧すら私は持っている。

この点から見ると、吉田氏の所説には看過することのできな大きな問題が含まれているように思えるし、また私自身としても、拙稿に向けられた(遊牧經濟に對する評價が)「低すぎる」という批判に是非答えたい。以下は、私がこのような立場から、當時の遊牧經濟についてなしうる「低すぎる」(吉田氏評言)評價の爲の覺書である。

拙稿における「遊牧經濟にたいする評價」は、吉田氏も指摘されるように、決して高いとは言えない。それどころか、私はそこで「脆弱性」という言葉さえ用いていることを、改めて確認しておくべきである。遊牧經濟は常に脆弱性を孕みつつ存在していた、という考えは今に至るも變つてはいない。當時のモンゴルの遊牧經濟が、保有家畜の増加をみたということ、あるいはそれが森林型を脱して「ステップ型」に達していたということ、私にはそれらの状況の變化が遊牧經濟の評價を高めるための決定的な項目とは思えない。確かにそれは要件の一つであろう。しかし吉田氏の立論には、當然眼を配るべき基本的なファクターが脱落しているように考えられる。

私には、吉田氏がなぜか一切その論説で言及されなかった、遊牧經濟をとりまく多岐にわたる不安要素こそが、決定的なものと思われる。私たちの前にある史料や研究の中からも、古來モンゴルの遊牧に脅威を加え續けてきたそれらの重大なマイナス要件は、容易に確認することができる。本稿では紙幅の都合上、それらを網羅的に論述する餘裕はないが、一二の問題に論議をしばりこんで具體的に話を進めたい。

二

たとえばゾド *Зод* である。ゾドとは、D・トモルトゴフ著小澤重男編譯『現代蒙英日辭典』(開明書院、一九七九年)によれば、

「災害(モンゴル特有の氣象的天災)。Гэн Зод(旱魃)、Наран Зуд(雪害)、Хар Зуд(雪が少しも降らず、しかも嚴寒の爲に起る災害)」「(二四九頁)とある[なげ、Я. Цэвэд, Монгол хэлний *моён малбар толь*, Ув., 1966. 249-250 Зуд]は、「自然の條件によって人間、家畜の食料や飲物が缺乏して激甚な災厄を廣くもたらす時期」とあり(二八一頁)、現象そのものというよりは、むしろそれが襲來する時期が意味内容とされている。先掲のトモルトゴフの語釋とはズレが見られるようだ。モンゴル語の辭書には必らずエントリーされる重要な語である。吉田氏は、かつて「モンゴルの遊牧の基底」(『モンゴル研究』一一、一九八〇年)なる論文を發表され、ゾドの脅威とそれに對處するモンゴル遊牧民の方策を現代モンゴル人民共和國の場合について述べておられる。そこでは、當然のことながら、ゾドの恐ろしさが語られ「ゾドがおこると大量の家畜が死ぬ危険がある。この危険は現代のモンゴルにおいてさえ解消されていない」(四一頁)とも言われている。モンゴル研究においては馴染みの深い、この不可抗力的な天災を、吉田氏はどうして遊牧經濟の能力を評價する際の検討材料にされないのだろう。あるいは、ゾドやその他の種類の不安要素は、當時のモンゴルの遊牧經濟に打撃を加えるほどの脅威ではなかった、と考えておられるのであろうか。ここでは、煩を厭わず私の言うところの不安要素を列挙してみよう。

先ずゾドである。ここでは、吉田氏が「基底」論文で例示されたゾドとの重複を避けて、私なりのゾド像を語りた。吉田氏の「基底」論文で扱われている時期は現代である。ところで、ゾドに相當する現象は、今に始まったことでは勿論なく、古くから史料の中に散見される。よく知られているものを幾つか挙げてみよう。

古く『史記』卷一〇、匈奴傳に見える、

其冬、大雨雪、畜多飢寒死。(元封六年)

『漢書』卷九四上、匈奴傳上にある、

其冬、單于自將萬騎擊烏孫、頗得老弱、欲還。會天大雨雪、一日

深丈餘、人民畜產凍死、遺者不能什一。(本始二年)

『舊唐書』卷一九四上、突厥傳の記事、

其國大雪、平地數尺、羊馬皆死、人大飢、……(貞觀元年)

同書に見えるその續きの描寫、

頻年大雪、六畜多死、國中大饑、額利用度不給、復重斂諸部、由

是下不堪命、内外多叛之。(貞觀二年)

また『唐書』卷二一七下、回鶻傳下の

方歲飢、遂疫、又大雪、羊、馬多死、……(開成四年)

という記録など、いずれも程度の差こそあろうが、ゾド(これらはみないわゆる白ゾド *paran syd* に類するものである)を描寫したものである。ここに掲げた例の幾つかは、この天災の打撃によって、その國が滅亡の危殆に瀕したという文脈に現われたものである、ということは注目に値するだろう。白ゾドの事例は『元史』においても容易に見出すことができる。すなわち、ここでとりあげる諸例は、まさに吉田氏論說で問題になっている「十一世紀〜十三世紀の時代」に關わる記録である。副題に「十一世紀〜十三世紀の時

代」と謳い、その時期について考えたと明言しておられるのであれば、少くともその時期に關わる文獻史料の内から遊牧經濟の能力を判定するのに役立つ諸要素を(プラスにせよマイナスにせよ)檢出し、讀者にそれを提示するくらいのは作業は當然なされるべきではないだろうか。その種の記事が存在しないというなら仕方がないが、もともとそれほど豊かでないこの時期の史料の中に散見されるのだから、この感は一層私にとっては強い。試みに『元史』から白ゾドの事例を抽出し、時代順に掲げてみよう。

以往歲北邊大風雪、拔突古倫所部牛馬多死、賜米千石。

(卷一五、世祖一二、至元二五年三月乙未)

稱海至北境十二站大雪、馬牛多死、賜鈔一萬一千餘錠。

(卷二〇、成宗三、大德五年七月)

北方乞祿倫部大雪、奏買駝、馬、補其死損、出衣幣於內府、身往

給之、全活者數萬人、還、賜七寶笠。

(卷一六九、賈昔刺傳、大德九年)

朔漠大風雪、羊馬駝畜盡死、人民流散、以子女鬻人爲奴婢。拜住

以興王根本之地、其民宜加賑卹、請立宗仁衛總之、命縣官贖置衛

中、以遂生養。

(卷一三六、拜住傳、延祐間)

蒙古大千戶部、比歲風雪斃畜牧、賑鈔二百萬貫。

(卷二八、英宗二、至治三年四月)

是歲、大寧蒙古大千戶部風雪斃畜牧、賑米十五萬石。

(卷二九、泰定帝一、至治三年)

是月、諸王喃答失、徹徹禿・火沙・乃馬台諸部風雪斃畜牧、士卒饑、賑糧五萬石、鈔四十萬錠。

(卷三〇、泰定帝二、致和元年六月)

鎮寧王那海部曲二百、以風雪損孳畜、命嶺北行省賑糧兩月。

(卷三五、文宗四、至順二年四月)

河州路大雪十日、深八尺、牛羊駝馬凍死者十九、民饑。

(卷三八、順帝一、至元年三年壬辰)

晃火兒不刺、賽禿不刺、紐阿迭烈孫、三卜刺等處六愛馬大風雪、民饑、發米賑之。

(卷四〇、順帝三、至元五年己未朔)

大斡耳朶思風雪爲災、馬多死、以鈔八萬錠賑之。

(同前、至元六年三月丁巳)

達達之地大風雪、羊馬皆死、賑軍士鈔一百萬錠、并遣使賑佐烈干十三站、每站一千錠。

(同前、至元六年七月庚辰)

木憐等處大雪、羊馬凍死、賑之。

(卷四一、順帝四、至正八年正月甲子)

降雪による家畜の災害が、各地で様々な種類の被害をひき起こし、そのたびに元朝政府が賑卹にのり出している様子がよくわかるが、北邊が「興王根本之地」であつてみれば、その處置のあれこれも當然といえるであらう。元朝成立前にモンゴルを訪れたルブルクも「わたしどもがそこに滞在在中、御復活の大祝日ごろに、風とともにやって来た寒さのため、その時死んだ家畜は数えきれませんでした」(護雅夫譯『中央アジア蒙古旅行記』桃源社、一九六五年、二一八頁)という狀況を報告し、また「強い風が吹いて寒さがひどく、大變な雪が降」つた時には、カンは眞夜中に使をよこして、寒さと風とを和らげるよう神に祈つてくれ、と頼んだとも述べている

(同前書、二五〇頁)。また元朝期、世祖の許に赴いたマルコ・ポーロも、元朝政府の冬季における家畜被害に對する救済の模様を記している(愛宕松男譯注『東方見聞錄、一』平凡社、東洋文庫、一九七〇年、二六〇頁)。ゾドをもたらす氣まぐれで厳しい氣候については、『黑韃事略』の「其氣候寒冽。無四時八節、四月八月常雪。」というよく知られた記事があるが、これまた有名なジャダ「*Jada*」の呪法なども、變轉常なきこの地域の氣候を背景に成立しえたのである(「ジャダについては、岩井大慧「遊牧民族飢苦資料匯集」(『遊牧社會史探究』七、一九六一)、羽田明「ジャダの呪術について—シャマニズムとイスラム—」(『三笠宮殿下還曆記念オリエント論集』一九七五年)を参照のこと)。時代をずつと下げてみても、狀況が變ることはない。モンゴル人民共和國の史家ナツァクトルジの「ハルハ史」にも、ゾドは深刻な災厄としてとり上げられ、家畜がゾドに襲われると斃死して損耗を生じることが非常に屢々あつた、と述べられている。清朝治下のハルハにおいても、自然の猛威に對しては殆んど無力だということがわかる。一八八五年の雪害においては、アラト(牧民)のホシヨイ越境禁止規定が緩和され、被害のより少い地域への移動を認める措置さえとられている。だが、「ゾドが廣汎に發生したら、いくら移動しても無駄で、大多数の家畜が死んでしまふ」ところ(III. *Haiaropk, Xaxayn myyq, 1691—1911, Yb, 1963, 107-p tar.*)。ホズドニエフは「一八九二年モンゴルへの調査行の途中、北ハルハの名刹アムル・バヤスガラント・ヒート(慶寧寺)での見聞として、一八九一/九二」は、九一年の終りから翌九二年初めにかけての冬をあらわす。九一年と九二年の(二回分の)冬ということではない。以下同じ」の冬季の嚴

寒と吹雪のため、家畜の斃死が夥しかったと報告している。しかもこの場合は、夏季の早刈並びに牧草不作とセツトになっている悪性のパターンであった(A. M. Позднеев, *Монголия и Монголия*, ЦИП, том 1, стр. 18, 42, 英譯本 *Mongolia and the Mongols*, Vol. 1, Uralic & Altaic Ser., Vol. 61, Indiana Univ. Publications, 1971, pp. 12, 29.)

三

革命後について見ても、ゾドが激甚な被害を牧民にもたらしている例は、枚擧にいとまがない。吉田氏は「基底」論文で、「申歲のゾド」として知られる一九四四/四五、一九六七/六八の二例をあげておられるが、管見に入ったものを一瞥しても、ゾドはもっと頻繁に發生しているようである。たとえば、吉田氏が「基底」論文で利用されたムルザーエフの著書にも、一九三八/三九に三百萬頭以上の天災による大量斃死があったと記されている(穆爾札也夫「蒙古人民共和国(自然地理)」北京、一九五八年、四〇—四一頁)。一九五九/六〇、六〇/六一の二度の冬季には、合わせて約三百萬頭の家畜が失われ(坂本是忠「モンゴルの政治と經濟」アジア經濟研究所、一九六九年、八二頁)、一九六三/六四の冬には、六三年夏に降水量が少なかった地域もあり、また早くから降雪があつて、遂に大風雪が襲來した。大部分の地方で、夜間の平均気温が氷點下三五〜四〇度まで降下し、大量の家畜が死んだ。この時には、家畜間に傳染病も蔓延したといひ、被害の規模を更に大きくする原因となつた(Улан Монгол人民革命黨機關紙、1964—11—1)。同新聞には、

災害發生とともに鬘髮をいれずソ聯邦をはじめとする多くの友好

國から、各種の救援が踵を接して寄せられる様子が頻々と報じられている。輓近の例では、一九七六/七七のそれがある。このケースでは、一九七七年二月の嚴寒豪雪が決定的な要因となつたのだという。この時は家畜減少率が、大ゾドとして吉田氏「基底」論文にも見える一九六七/六八に比べると二〇%少なくてすんだ(傍點筆者)と報じられている(Улан, 1977—XII—23)。國家を擧げての應急措置が速やかに講じられる現代モンゴル、また友好國からの有効かつ迅速な救援が得られる現代モンゴルにおいてさえ、ゾドの被害はかくの如く深刻である(なおここでの例示は、本稿の性質上、主なものにとりあえず擧げたにすぎない。より狭い地域に發生したゾド、被害の比較的甚大でないものは除外されている)。

この種の災厄は、當然のことながら、いわゆる外モンゴル地域に特有の現象ではない。かつて「蒙疆」地區で興亞院政務部が行なつた調査では、普通の年においては全家畜の一〇%が冬季の災害によつて失われ、民國二三年(一九三四)には稀有の大雪害が發生し、全家畜の三分の二が斃死したという、と記録されている(興亞院政務部「秘・蒙疆牧業狀況調査」調査資料二六、一九四一年、二二六頁)。また、内蒙古の牧業地域における白ゾドと黒ゾドは、氣候分析資料やゾドに關する實際の災害記録によれば、四、五年に一度はどちらかが發生して牧業に危害を加える、という指摘もみられる(中國科學院内蒙寧夏總合考察隊・華北農業機械化學院「總合考察專集 内蒙古畜牧業」北京、一九七七年、三二頁)。また同地域における被害の實態を示す資料もある。近時のものとして特によく引用されるのは、一九六五/六六の四二六萬頭、一九七七/七八の三一〇萬頭の二度の大災害であるが、その他にも百萬頭を上まわる家

畜斃死のあった年は、一九五七（一七六萬頭）、一九六七（一九〇萬頭）、一九六八（二〇〇萬頭）、一九六九（一四三萬頭）と數次にわたり「この統計は、一九四七—七七年度の間のもの」、冬の災害が決して稀にしか襲來せぬものではないことをはっきり物語っている（王秉秀「充分利用牧區飼草資源高速發展畜牧業」『內蒙古社會科學』一九八〇年第二期、五二頁）。

自然的災害としては、今述べた雪害（白ゾド）の項にも少し姿を見せていた早魃も無視できない。ゾドといえは雪害が第一に思ひうかんで、ややもすればその他の概念に思いが及ばないのであるが、*Резуха*とは早魃を意味する、十分以上に實態をともなった言葉である。「元史」の「是歲大旱、河水盡涸、野草自焚、牛馬十死八九、人不聊生」（卷二、定宗三年）、あるいは「鐵里干、木憐等三十三驛、自夏秋不雨、牧畜多死、民大饑、命嶺北行省人賑糧二三石」（卷三四、文宗三、至順元年九月）などという凄惨な記事は、早魃の脅威が雪害に劣らぬものとなることもある、と思ひ至らせるではないか。また、夏の早魃と冬の雪害があいついで襲來した場合、牧草凶作のまま迎えた冬に厳しい災厄に見舞われるというパターンとなるため、二重の打撃を受けた家畜の損失は致命的な規模ともなりかねない。「元史」に見える「德寧路去年旱、復值霜雪、民饑、賑以粟三千石」（卷三八、文宗五、至順三年二月己酉）という比較的小規模な例、また前述の一九六三／六四のケースの如きものである。ナツアクトルジによれば、清代ハルハにおいては、早魃が発生すると、雨乞いの儀式が行われることもあり（*Хангалуук, 108-p. Таг.*）、また牧民たちの間には、天候異變の兆候に對するこまかい觀察、そのノウハウを感りこんだ言い傳えがあったという（*Мон*

гол, 111-p. Таг.）。氣象の急激な變動によつて牧民たちが蒙むる苛酷な災害を思えば、彼らが天候のありように敏感になるのも蓋し當然といえよう。

四

そのほか、どのような天災が恐れられているか、ということについて此處に興味深い材料がある。先にもふれた一九六三／六四の雪害の、いわば眞最中に、不時の災害に備える。家畜保險、*Марийн Дагтан*なるものが設定されたのである（*Ууча, 1964—II—24*）。その内容は、まず大きく二分される。「事故」と「病氣」であり、前者には（早魃・霜害・猛吹雪・冷雨・雷・水害・地震・火災）が項目としてあげられ、後者は（傳染性・非傳染性）に細分される。これらの設定された諸項目は、家畜をとりまく環境の多難さを窺わせるものであろう。序でながら、これらの項目のいくつかを検討しておこう。自然發火の（前出「元史」の「野草自焚」の例）、あるいは過失による草原の火災は、さなきだに少い越冬用の立枯れ草の組織的な喪失を招くし、水害は、水害それ自體よりも、むしろ派生的に起こる家畜の傳染病、寄生虫の蔓延などの被害の方が恐れられるのである（興亞院政務部、前掲書、二三七頁）。疾病も家畜にとつては恐ろしい要素である。ナツアクトルジは、清代ハルハの牧民たちが、家畜の罹る各種の傳染性、非傳染性の病氣について、症状の見分け方、治療法、隔離の仕方など多岐にわたる豊富な知識をもっていたという。にも拘らず、清朝時代かの地では、家畜を襲う各種の傳染性・非傳染性疾病が大きく廣がり、家畜が損耗することが非常に多かった。そして一九世紀の末期、ロシアの實業家がモンゴル

の家畜を買いつけようと意圖したのだが、それには先ずモンゴルに牛疫治療施設を置くことを不可缺の条件と見なした、とも述べているのである (Hararopk, 112-p. tar.)。

狼害もかつては無視しがたい脅威をもたらしていたようだ。ペルリンは、冬季に家畜は「食に飢えた狼群の被害を蒙ることが少くない。毎年狼群に喰ひ殺される家畜は二十萬頭を超える」(ペルリン著播磨楮吉譯「蒙古人民共和国の現状」『蒙古』昭和十六年五月號、三九頁)と述べ、豫想外に大きい狼害のありようを指摘しているが、ナツアクトルジは、大規模の狩獵を行なわなかつたことが原因となつて狼が大いに繁殖し、モンゴルの家畜の敵の一つとなつた、という因果關係を示している (Hararopk, 112-p. tar.)。

以上、大方の判断の便宜を考えて、比較的目障しやすい史料、文献を選び、また引用も極力文脈に沿って行ない、古來モンゴルの遊牧經濟を脅かしつづけた各種の不安要素について簡述してみた。いつ降りかかるかわからぬ災厄、「夏飽、秋肥、冬瘦、春死」と言い交されるように(張正明「内蒙古草原所有制問題面觀」『内蒙古社會科學』一九八一年第四期、二七頁)、一應常に牧民の念頭にはありながら、一旦生起するや時として激甚な被害を彼らに與える、このような構造的な災厄に常時隣り合う遊牧經濟を、高い評價にふさわしいものとして位置づけることは、私にはできない。本稿で述べてきた様々な形態の不測の災害に對し、何らかの備えをしておき、被害をできるだけ軽減する、つまり完全にそれらの災害を免れることは不可能だが、復原力を少しでも高めるといふような措置が、有効かつ普遍的に行なわれなければ、私の言う「脆弱性」はモンゴル遊牧經濟の基本的な性格から拂拭できないであらう。現今の

モンゴル人民共和国においてさえ、それらに對する有効な防備策が達成途上にあるということは、家畜の避難小舎 (yandaa, 吹雪をはじめとする天候上の災害を防ぐほか、モンゴル牧畜の大敵である狼害を避けるために設ける。穆爾札也夫、四一頁)の建設や、冬越しの用に供する干草貯藏などへの、毎年のごとく新聞紙上にあらわれる大々的な奨励キャンペーンを見ても納得できるだろう。

五

私の當該時期のモンゴル遊牧經濟に對する評價が「低すぎる」とすれば、それは如上の諸要素を背景に置いて考察したその結果であり、これを高める方向での評價の修正の必要性を私は認められない、ということを重ね確認しておきたい。遊牧という經濟形態は、もともと「非常に不安定で、發展の速度はのろい」(李宗海「畜牧業經濟若干理論問題」『内蒙古社會科學』一九八一年第六期、二六頁)と認識されることが多い。吉田氏の論說には、當時のモンゴル遊牧經濟のもつ基本的な性格の検討が見られず、數々の陥穽(まさに本稿で例示しような)も姿を見せることはない。氏が評價を行なう際に言われる「一定のレベル」(二一九頁)とか、「モンゴル高原の通常の遊牧民のレベル」(二二一頁)とかの表現は、氏自身も「基準をどこに置くかは困難な問題だが」(二二〇頁)と言われるように、今一氏の眞意を明瞭にしているように思えないので、それをもとに組立てられた「高い評價」論を仔細に検討することはできないが、ただいかなる暗い側面も持たぬものとも受けとれるような史料の表示の仕方、論の進め方、そしてそれにもとづくらしい「發展」のみが前途にあるかの如きモンゴル遊牧經濟像には疑念をもた

ざるをえない、ということだけは附言しておきたい。それゆえにこそ、讀者諸賢に異なる方向からこの問題を考える可能性があるということを知らせるため、この覺書を著したのである。

最後に、ここでは是非觸れておきたい問題がある。即ち、吉田氏論說中の、原山は、モンゴル人が家畜減少を防ぐために家畜の屍肉食用を習慣とし「ハレの場合以外はそれを屠殺しなかつた」(一二七頁)とする、という部分である。これは拙稿の文脈の誤讀(でなければ曲解)である。拙稿一八頁には「モンゴルにおいて特別に家畜を屠殺するのはハレの場合に限られており」とあり、まさにその箇處に附された註脚で、普通の場合の屠殺について後藤富男『内陸アジア遊牧民社會の研究』(吉川弘文館、一九六八年)に述べられた

定期的な屠殺を引用して述べている。これが事實である。吉田氏の論說によると、原山は「モンゴル人は家畜の屍肉のみを食し、屠殺はハレの時に限って行なわれる」という世にも奇妙な理解をしていることになってしまいが、そのありようは、今言ったように平常のケースと臨時的な措置の二通りについて論じているのである。吉田氏の引用された多彩な文獻を見るにつけても、この種の潤色が、ここ一ヶ所のみ存する例外であることを祈らずにはいられない。ともあれ、吉田氏の論說を読む人が、すべて拙稿をあわせ参照されるとは限らないとも思われるので、蛇足ながらここに明記する次第である。